

日本偽書考略

埤

特別
14
1919
678



特
14
1919
63
678

氏族類

聖德太子傳曆

一名平氏
太子傳

一卷 二本

三郎假名抄言釋下州七云解引太子傳云後世好事人化
まゝ物語とてころゝやうなり

安高隱筆軸題刻云太子傳曆印本あり今絶版一書
少し此書聖德太子一生の傳記に撰者の平氏とあり其名字
並時代詳かゝるゝ太子傳を日本記に引合せり日本記
に載る年月を太子傳に載る是より怪妖妄の偽化を述
れ日本記に載る所の年月より其偽化のよりるに故て
がと日本記に載る年月を拾いて偽を述る者あり古き
偽あり故日本記に載る年月を尋ねる所巧き偽也の所



子登涉事俗間所傳之緣起亦不載此事是余之所訝也世之褒美
太子者每曰過洛而繅其宮惟不少矣今云昇富士岩猶且疑
之而云太子駕青龍車入隋國取南岳舊房法華經凌雲宮而
歸日本則愈疑愈訝余豈信哉案釋迦語其托誕于淨飯王宮
而為悉陀太子老年中種祥瑞神變不可勝數也彼提聖使
太子傳亦蓋見悉陀太子之語而摹慕相似耳

字書類

類聚名義抄 十一卷

古今要略 草木部 木權をあらわす云々 一休天皇の以
前よりこころをもちて 類聚名義抄に并キハナク又アサカ
と云へるを始とす此書は在るの是美公の心より言傳
へる既に辭をアサカ木と訓し是は和名なりといふ後、此
一抄よりいふ

素氏漢語抄 十卷

要南池華日薩蔓春云々 又云今世素氏漢語抄と云書
あると傳し難し一本より素字を掲げ心をもちて格へき
なり也

二人丸抄 一卷

作家故実卷一云世に定家の倭名をて云ふものこそ今倭名と云ふは
倭名に對して云ひ出し詞なる此倭名を大炊助親行が拾遺思ふ
は清公と云ふ考証せし孫の行阿が定家倭名をて云ふ名をおも
へりといふは四卷の輕重をいふ事なく古きもの証あるもの
が作り出し言言る人取用へくもあらず幸てさうの阿の倭名大
乗村に餘存せんは云ひし人々やんといふ事清家も用ひし
倭名をいかりつゝ別定家卿の傳に拾ひし深き方あるが
いふに何いひもや必清布の定家倭名をのりきこといひる事
物とあはれしと思ふ

三部倭名物語釋卷上云三人九條物語ありは注しやしりなん
物と云ふ事や一二つある事ありし物と云ふは引引
人との事と云ふ人ともまじはる事

此等即ち河内倭名まの事なりといふ事數字倭名をのりし
三人九條物語の河内前司親の朝臣述心ありは同朝の定家の
清公のまの事なりといふ事やんといふ事清家も用ひし
倭名をいかりつゝ別定家卿の傳に拾ひし深き方あるが
いふに何いひもや必清布の定家倭名をのりきこといひる事
物とあはれしと思ふ

物類

真字如執物任二卷

唐才何如物語 三卷

玉勝詞卷五十五云伊勢物語に真名本といふ本あり昔は今の如くま
るくいりて真名といふ書なり物の上條菅の御撰と云ふはあけん
ばその初まの御志と云ふと見てもわけは阿久ぬ偽り後物語
まかまてり字のあてとまいといひたるもいふわけは正しくい
心得ぬことのみも多かり云々然にあらざる詞のみの古の傳本
とくくべて考ふるに互ふべきありき下とて假名本の如き
此本のよきも少かりき之と云ふ人も昔の一つのまじりて假
名本といふの書きさうしなるをいふべきやんば今七一をいふ
き物に云々といふは又伊勢物語或人の出たる四本といふも真名の

本も一つあるものといふことには、いふまでもなく、大かた今の京のうら
世の人々の雅き真名の書きさへするや、多しと云ふは是れ其の大き
なるものなり。やむ出ても人のこころの志をば、いふにける志が
いふなり。今の京とて、その書も、いふに、後学の清濁をも、さ
るおろしく用ひざるを、悉く清濁とも、みだりたること
にいづく。尤も、その始りて後の人々、いかに元あること

(一)

伊勢伊勢物語

屏風の巻三三是在源流春の化のより自序するより記すをなく
 依りたるやん思はせたる中比の傍者といへり二字も男女のより
 ほととぎすより源春の業子の男よりて父の流を傳くも七条の龍
 胞を撰ぶよりかりあるん男女お含めんとて説く天下萬物五の

秦原製

四時より伊勢のちいさな方々へも、安説つていゝものといひ此物語の
古注といふ物古く傳りて知類集と稱する三帖を是と大納言
經行の著したといひ傳へたるものと一條禪院の愚妄抄に論
一云云と描きしは北條肥七曰くおひの偽名をんやうとに句を
くまひのふあふ。

知顯集
三卷

卷之三 此物語の古注といふもの古く傳へて知歎集の号でも二
 枚あるといふ大納言任行の事といふ縁あり其子と一條禪院の思安
 物と論へて云 彼知歎集の業平中將の馬頭觀音小町に如長輪觀音
 の化身と云り其の胡亂うらんなるなり也是は後世の色ぬの人比るの方
 人なりある任行の老をうけて撰記せらるやとて是侍のまこととてはつ
 の筆にうゑる定家の又れすいぬるはむきうきと物語の名を大いに

一市用たりとて侍らむといふはつゝうきふ云

宇治大納言物語三卷

紫文要訣云宇治大納言物語とて今あるもの偽作も其の隆四
心の物語なりとあるも後の人の名をかりて送るものと見えし

四季物語

云勝間卷八^ハ云「唐衣おりてきたる神といふ神とてちなる梅もそ
まゝ心^ハに誠の心と叶ひたる祈りもそも神や守らん此二首の哥
いづれ神の心なり時ちの四季物語といふ物語二月廿五日の神の祈
りこゝなり此哥も後の世にまゐりといふ拙き哥なり此四季物語
といふ物語なりとあるなり」

古事記傳卷十二^ニ云鴨長の四季物語と云ふ物語下鴨と中津
より大山咋神と坐して是もあつたりと云ふ物語尾日まゝと坐し

御神なりと云ふべしと云ふ四季物語と云ふ心まゐるものなり
下鴨と大山咋の神と云ふこと他のおもひえぬことなり云
十六夜日記残月物語卷二^ハ云四季物語の長がひとあるなり
と後の物語なりと云ふ侍らむと云ふと書けるなり

古事記傳卷三^ニ四季物語の偽作也ハ朝祝の起り正史
實録と見えし用ひたるなり^{枕草子卷三の朝祝と見えし}又十八條の素禪

又云是又正史實録に當て見えしことと云ふに信用するべし
四季物語の長がひと云ふ侍らむと云ふと書けるなり

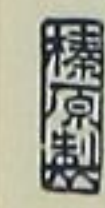
群書一覽卷三に四季物語字を長時告の此と云ふ卷末に三好伯
陽新長安の真字の飯ありと云ふなりと云ふこと次に歌林四季
物語十二卷^本と云ふ四季物語の物語と云ふこと時社頭の手をまゐ
へりなり巻終をわつすといふ四季物語と云ふと云ふ文章の條

條にふりて又改る此物語貫之の枕草の故をうりて
ふりて其の連風と記す蓮風の故の　　とて此の金
仍る　　とて此の心ある　　とて此の心ある
一と仍る　　然るに東海名所図今凡例は其の徒に
とて此の心ある物語を引り此の書に記す　　とて此の心ある
四巻物語の二書の後人の准心する仍る　　とて此の二書に
仍る　　とて此の心ある　　とて此の心ある

物語書目備考云直方集此物語板にも字もいふ所ある
賀茂氏其淵委き考あり

住吉物語二卷 三本

百人一首改観抄卷 源後頼朝の
新の 泊瀬と恋を祈る　　住吉物語
は　　起る　　とて此の心ある　　とて此の心ある
今更物語と云ふ　　とて此の心ある　　とて此の心ある



いと云ふ源氏物語に　　とて此の心ある　　とて此の心ある
初瀬と恋を祈る一條を心する　　とて此の心ある　　とて此の心ある
瀬のうれ　　とて此の心ある　　とて此の心ある
此等と云ふ恋の初　　とて此の心ある　　とて此の心ある
皇弟一皇子敦の院王の御う　　とて此の心ある　　とて此の心ある
り　　とて此の心ある　　とて此の心ある

宇比麻奈備下巻 四條の
歌　　今更住吉物語をわ　　とて此の心ある　　とて此の心ある
其後世の独　　とて此の心ある　　とて此の心ある
の　　とて此の心ある　　とて此の心ある

源氏雲隱六卷 附山風霞

玉小柳卷 源氏物語
作者　　云隱雲の巻に名　　とて此の心ある　　とて此の心ある
ある　　とて此の心ある　　とて此の心ある
ある　　とて此の心ある　　とて此の心ある

えりしと云ふ物也又山家の霞と夢の浮橋の客の来につけ
る物ありといふ云隠といふ物といふ文句を味うばまうをね後
の人の作りしもの式部が著しに似てあるといふことあり云
居書一巻云云此書第六卷の奥書云云云隠六冊元源氏物語
全部者也整式部親言の寶殿に奉納す誠は善哉之紀事也寺
之什物也康平元戊戌曆四月日石山寺住僧大僧都信春又云
石山寺冬龍金夢有也此六冊を賜る後此の寺の寶殿
に奉納すといふ奥書あり元應元年九月二日正二位權中納言
藤原親實と云ふ此書といふ物ありと奥書の裏面に記す
云

紀行類

松山日記一卷

玉勝間云、清少納言が年老を候へ、奥松島に下りける所の日記
と云やうに松崎日記と名づける物一冊ありめづる。見えへに
うゑやういふべき物ありと拙く見えらるる物也。さういふべき程
長きとす。老の心あるものなり。

須磨記一卷

玉勝百卷云菅原、大臣のむろくといふ須方の記といふ物語にや
よゝゝひろいといふ誰か実と思ひて、のゝこんとたいやゝも偽りある
ふせやかゝる歎歎わくも多しうきくして心ふべし

数聚名物考青森部云須麻石部記一冊是又其舊家藏也へ大正の時
道主人より意せ給へる物と云へる其由より白太夫よりや唯ふ

ことあり金くろききしこ志中古き有ハ八条殿の家下とも傍割
 といはけえし物もあなも其時代の物なり飛つて自づのころ
 伏原左衛門替屋豊かち志のころより由ぎ及ひて又云ハ条殿
 の御家より出てゐていふもあな御傍なりといふこと

長明海鏡記一卷

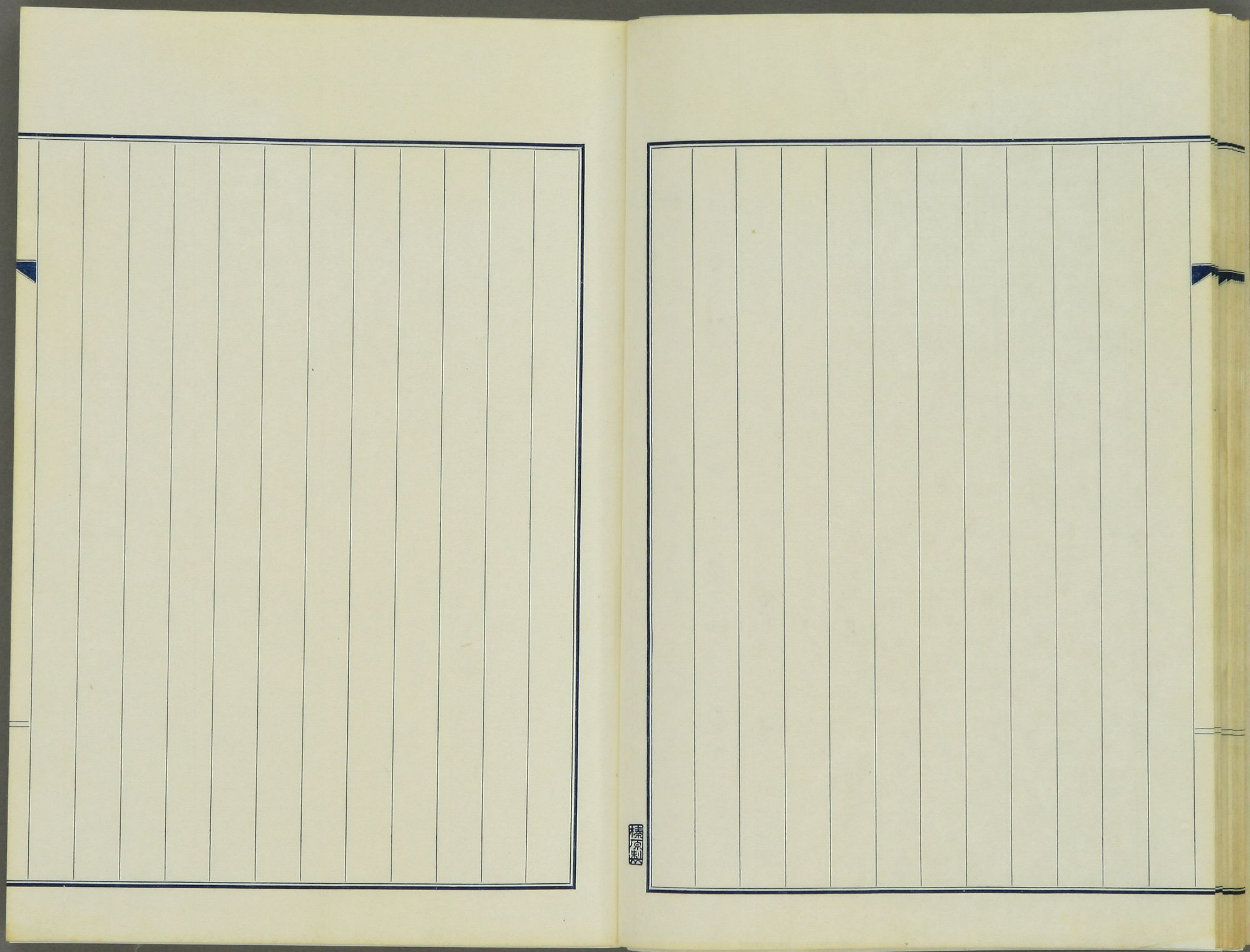
東海道志卷二凡例云廿四爲未の道に記此者のうゑ
書あり予是を校めんとて承元五年即建暦元年也十月十三日猶念こや向
し遠保軍二月八日春秋六十四年より二十平すといふ海邊にたゞるは二
年卯月上旬花洛々出ると書れんか其時の入麻の後七年も経つと
北洋鎮志より和歌山長崎より河へ彼人の藝する不なるといふなり
其三群の爪付黒白くてもぬき脱ぎさしてぬけり其の無名物
大文江の二書よりおろしくあり

榛原製

和歌書譜考卷四諸記に二冊より元一冊誤して二冊とある白河の息
中山の禁に任じし間、後堀河院の貞應二年に勅令を下り記の
也傳布の誤りあり幽斎老人の跋より長めの心と云ふへき不審也
源光行心なりといひ羅山文集に云えり

新編錄余志引周書目云海遊記昔鴨長明海月記者非也歌
枕名寄此海遊所載和歌者鴨長明今按歌者長明作而
詞者後人所製也乎

羅山文集卷五十五是書跋云此記世稱鴨長明所記按夫本
抄載此記中之富士白雲寺住歌數首皆以為源光行東行
之所然則世之所稱誤矣



100

歌書類

古萬葉集序

和歌集卷二廿二 嵯峨天皇の古萬葉集の序は偽撰と北条の時平が
字に出来たりといふ然るに今こそ人々自由に書ける後世の出来に
この中に自由といふこともなく況や此序偽撰と云ふ者も亦洋々と
清内とみづ瀧野貞主の江國集山野岑守の凌雲集仲雅王の文
華集藤原をみへべし思われ源氏物語にさか天皇の古万葉
集と書くも亦季吟の湖月物語に論ずる源氏の言を能き
かいつくさしむるものなる偽り心りし物語を是とせやむことなき人
も歟と云ふ時倉富の物語す

古今集序注

大日本史卷二百十八

在原業平
朝臣傳

云梅紀貫之序古今和歌集也

業平及僧遍昭文屋康秀僧嘉撰小野不町大友里主六人評之後世
稱曰六歌仙源親房古今集序注作六歌撰而其書蓋係廣心仙
撰字亦不同六歌仙之名未詳始于何時姑附于此

古今三木三鳥秘傳

定齋隨筆卷五第六條云三木三鳥貫之時代誰とも知らざるべ
べけんも年代送り隔りて後、物の名も愛し詞も易りなるを切ぬる
多し其の廿二知りたる人々も時を來て好事の者妄説を新色し
偽書と著し上吉の人名を誣し其をも或世の後來と稱し人を欺く
るあり其後神々佛法陰陽五行の理等をもわたり造作し事理をぬ
るすわらやうに巧きもの多し余の信をぜぬぬるを切ぬる
片附と云ふこと也彼神々佛法陰陽五行の理を混雜し牽強
附合し巧言を好む淺學陋識なる小器の人のしるべきものなり

ことわざを陰秘にして人知るや由をもて人に傳ふるをぬる
者なり

同書卷十二第七條云東下野守平常縁が書常鹿六男東下野大夫鹿
頼とて下法小東庄三十三郷を領し代々歌人として大内・細川・同
侯・子孫在洛し其後ぬき時より下野守常縁の公方家の近臣
子馬の連者和歌の奥義を授けたる傳授の人多しけり（此家傳授の
人なり）
古今三木三鳥の傳授と云ふ事、北東下野守が始と述べるも
此夫を始と宗祇法師傳へし後にも弘くもさき世の人々
其傳を受くるものなりと或書くべし之より其書をいふ人等古
今傳授のよし多しよ、平常縁附合神佛習合の妄説取つて是
れなりと定家家隆の比も古今傳授と云ふ事なり

未來記 雨中吟一卷

三五記 二卷

僻寮抄 三卷

大日本史卷二百廿一定家云梅未末記而中吟三五記僻寮抄等書或以為定家所著蓋皆係倣托應云然今不取

歌仙家集 一名三十六人集 十五卷

河社云三十六人集はみづから集めたる後日人の集めたるも其集をいふやうにみづから集めたるにいかうかあるあらん受来りて又交しきして後日集めたる格なりと云ふ又床書長撰里主反々梅梁天方を里 卷又忠孝を添きと云ふ及ぶ一き後の心者を入んやうも多きと受来り云

三部依名抄言釋上卷云三十六人歌集の四人丸末人家持集にるい皆偽撰也其の延喜の比も人の集むといふに彼は

標本

集めて其集をいふにわづらひたりと云ふに文へ入るも多しみづから集めたるも多し

古今集打勝序云三十六人の歌集と云ふは人丸末人の集としてわづらひるこいへと云ふ人丸末人の集と云ふといふ人丸末人の集と云ふことと云ふことと云ふこと

人丸集二卷

河社卷二云人丸集はみづから集めたるも多し其集をいふやうにみづから集めたるにいかうかあるあらん受来りて又交しきして後日集めたる格なりと云ふ又床書長撰里主反々梅梁天方を里 卷又忠孝を添きと云ふ及ぶ一き後の心者を入んやうも多きと受来り云

ことなきを以て人九集のすゑぬめりしなり

古今集古注論云人麿集の偽也

類聚名考云柿本朝臣人麿家集 歌仙家集の偽也

猿丸集二卷

百人一首改観抄卷二云集といふも一巻あんど公任の三十八人の歌仙えくばもて後何人のちもあらん今の海舟の本の如きいふ實あるもこといふ信用ふなり其輕いもこと云へ人九集猿丸集是也二人の集りの歌すも猶五拾多人人宜く心を用ふべし又千賀家集の詞も既に三十六人集の石目あらん中古まじり全部の本七行けるまやくいふいふ心のかれに注之

宇比麻奈備上卷の猿丸の家集ともあをいふん必大なる人の歌

いふも外てふもいふもいふもいふも後人の作りたる名もこと

志すしこへ百首の猿丸とあひいふこと云く後世のものの

いふ人志すもいふこととあをいふもいふもいふもいふも

歌仙名考云古へ猿丸大と云人いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

鈴屋云奥山といふもいふもいふもいふもいふもいふも

昔の猿丸の歌といふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

すゑ猿丸の集といふもいふもいふもいふもいふもいふも

以て志すいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

候し難きうへ木と後人の作者とるべきに定家の元へ集り
いか有しかしら後子も既に古今よりみえりかと思ふかされふらぬ
とわく

家持の集

通昭集

業平集

古今集打聴に云家持集ハ正しくぬりも故とくす通昭集は
すべからぬなり也業平の集は後の人の書きあつたものなり
と通にさるなり

伊勢集一卷

河社云天曆の御時伊勢が家の集めしけんかまめらるる中務
れつかりし時の言のまゝいかきあつたものと云ふなりけりかめし

天曆御書を昔も名高きものなり其の集にこの言もさるるに
いふは家集もみつらうけりか中に元来うきものも交へる末
にやと云ふなり歌もまじり

小町集一卷

玉勝間卷四小町集云小町集のいふも信ふべきものなり其の
哥の多かる小町も小町はまのきりかいつらうけり然る

小町も小町集もいふも小町かといへんなり後也

後家集二卷

後家集二卷云後家集は其の歌を書集にみえりか
後家集も玉勝間の歌歌なり天神任の歌書集の連歌の入
りてはめなり歌歌なりと云ふ集以下の歌歌なりけり
其の哥なりハの集二冊のなり

いふ今の世に近き此新撰龍胆と印本よりいふ所は物

定家の鷹百首

数點名物云源信遍越島の語りい北者の言今も為久の尋
りてい其家へ係へ伝くる所久いをも極めて東極甚つのがえん
いりい昨せる由々伝くるといや

十二月花鳥和歌

口書云源信遍越島の語りい北者の言今も為久の尋
りてい其家へ係へ伝くる所久いをも極めて東極甚つのがえん
いりい昨せる由々伝くるといや

兵書類

訓園集十七卷

安南地華^{日陰}訓園集軍配の條書二十七卷有^{此書大江誰時}
より里原家に傳来と云^{曼尼}海峽の終り連名有^{其連名云}清和天皇
後胤自深義家公雪家代に相傳從三位源相臣賴氏^{賴氏}
源入從三位源相臣氏隆^{賴氏}從四位下源原信德朝臣^{大膳大夫賴武}
武藏守^{上良}常陸入務原秀胤岡本半助石上宣就傳来^此
有り又同書の中四十二條秘法の事と岡本半助と奥む^{此者慶長比}
於龍馬毘沙門寺感得此本即鬼一法眼相傳龍馬寺僧祐賴
的々相承之本也予其相傳之本合而見之咒而梵漢之文字有
二字相違想龍馬寺所之本未備大臣傳来其白河院相鬼一
法眼自多門天王夢中傳授之本也予所傳大江誰時傳来小三

泉家代々相傳之本也而祖間年代莫大前後之條方々相違有之者乎
雖然大方無異儀云發書上岡本并助和泉云日貞大業訓問集才六
領實檢の條に因と見えん國の事ナリ同才九に魔の作りやう又ハホラカニ
二魔ハ武田信玄同卷ニ乳付旗の國あり又曰天子の
錦の御旗日月を付る錦の御旗日月付ん同才十上は犬追物
の鞭の國あり犬追物ハ鎌倉の實相公ハ時略ニ同才十下は纓の掛や
を記し下は天井の佛中祿の佛の此等ハホロノ佛ノ名ハ後代
ホロノ用方失セテ龍ヲホロ
テ其佛ニサマノ名ヲ付テタリ右の事と云ひ皆後代始りたる事也
夫の事と載せりて以て訓問集ハ妄説偽伝の俗書こと知ふべし
侯才十下ハ又同才才十下ハ傳東有女子太公望
貴石公張良才太公望馬鹿門天王と云へ鬼一法眼泉次郎源

九郎義経祐順此四人列に昆山門を傳ふる祐順は清尊以下龍馬
法師中ハ人傳在一あり傳ふる趣も次ハ才前上略劍術中略良馬
下略と云ふ事あり是と三略の秘傳と号す其秘傳ハ皆梵字梵字
九家真言印相あり此ハ訓問集の金高梵字其意類を同くこ
甚多く事佛法を用ひる者太子太公望張良は傳来と云ふ
書に佛法を入るの偽也一あり彼四人の時代の漢土に未だ
佛法通る未と云ふ也然るも佛法を入るは独き偽りこ三略の書
ハ七書の中ハ在り訓問集ハ載せりやう山伏の事葉の類云々
信する事ハ勿れ

歌聚名物考云訓問集大江惟時ハ作の由云い甚廣物
中ハ仲長天皇皇樂宮と異國ハ後陶公と云ふ兵名を以る
者ハ兵術を習ひ候ハ則貴帝のハ陣ハ左神天皇燒し之を吞也

新考七書海纂大の福州三山施子美とあり然るに子美字とあり
今萬世統譜福州志三山志と取て檢閱するに見ゆる他の方と
俟つ

甲陽軍鑑

南留別志卷四云坂原正とあり其のち就ち坂原正左馬
虎佐と云り然るに甲陽軍鑑に他人の傳記するに正とあり
神卷談苑云甲陽軍鑑といふ書に坂原正が書けりといふは
駁難しとい信用し難きことといふんは甲州といふに正と出れ
るや坂原信玄といふかふはめづるにけしきいふのち未だ其
りて信玄が兵を弄ひけることをすめらん小刀細工といふてあ
りて正が草履といふことをすめけんといひけるに川角太平記に
えり未だの比まじりあはるるにまじりてさきとあへけん

常山記談苑七云甲陽軍鑑を坂原正書とせし傳記あり
久し勝頼はく友野大膳武田の人は甲州の滅し後引こり
隠ん居りしが書を物より香波と記す姓も云へり偽名多きを
云へりいへる甲州の事柄と云へる書面をみれば其の疑
はす権佐の家を讀みきよめと云へり此の云へる書面を
もあへり見せしめを考へて大に惑ひせんこと必なり云へり又言
傳くに説く甲陽軍鑑を著す本意は強ひて筆下り猿樂彦十
郎といふもの彦十郎は甲州滅後大久保忠勝の弟とて東照
宮の御書を書かて一書と云へり云へり又曰く載せる持氏生
害の上移りて云へり武田の滅し北条より天の四州とい
いへり持氏と云へり時勢なり持氏の滅亡は永享十一年といふ氏
康といふ遠く百八十年と傳ふに曰く時を記す北条早雲の延徳二

馬口年う月日今也永保四年九月十日川中嶋の合戦上杉家
河内よりと多人物語に云々

ある處に書十三云甲陽合戦より川中嶋合戦永禄五年九
月十日一なるより上杉家の記と大い違ひ甘味也
甲陽合戦より坂崎公記と偽り小幡勘兵衛景吉の意に
也甲陽合戦の軍法より云々又武蔵書院より和名書院
云の合戦と偽り云々又武蔵書院より和名書院
と手付七永禄三年上杉書院より云々川中嶋合戦の所と云
云武家訓又川中嶋合戦より川中嶋合戦の所と云
す也

武蔵書院若七云上杉義春入道入唐公方上隠石より京都
赴命河内關原より云々又武蔵書院より川中嶋合戦の所と云

方物に書かれ破少之書文十一年甲陽合戦と武人抄と云々
諸より云々入唐より云々又武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
時ふ来と云々河内本名武長尾の村より武蔵書院より川中嶋合
戦より云々武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
と云々武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
太夫書通が書に云々武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
我輩も居政書に云々武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
雲陽院義昭公より武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
其書に云々八月十日義昭公薨御破成雲陽院より武蔵書院より川中嶋合
戦より云々武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
此書より武蔵書院より川中嶋合戦の所と云
の云々武蔵書院より川中嶋合戦の所と云

南山巡狩録首巻例云南木武経恩地々書等のみを願ふと
事と云きん附合せしものやと云ふ

虎口物語に南木武経は延寶の頃安芸掃雲軒と云ふ生
るる楠の名を採りて仍に名を物と云ふ云と

夜令に

類聚名物云夜令に序云云常山重忠或は太田道灌の子
と出づと云ふ云々此の如く云ふ中云云あるは
あるは六十年前以来は出来ぬあるは其世に出来ぬと云ふこと
後世の名家あるの作なりとも宋儒の名を取らざる物

教訓類

和論語 十卷

貞丈雜記卷十六云和論語等の類偽なり故定考を用へり

送史省少書^考云氏^考所為撰^考を偽論語十卷云^考假託矯
誣或世之尤者先輩亦或既加辨駁則皆在余所法矣
棟梁集云偽論語^考いまだ^考なり^考あり^考又^考年中^考近江人
津田^考大^考なり^考大^考系^考國^考江^考左^考武^考鑑^考淡^考井^考記^考勢^考陽^考田^考記^考近^考利
治^考記^考る^考の^考作^考者^考が^考偽^考り^考なり^考あり^考ある^考處^考を^考友人^考物^考語^考の^考是^考偽^考れ^考
の^考卷^考る^考なり^考云^考り^考、^考と^考り^考用^考へ^考べき^考もの^考なり^考

虎口物語、和論語とある者、近江の四休と木家の浪人、友人
の歌や歌といささか、いささか、いささか、いさか、悟り、奥に狂言を神の

託宣よ仙の哥を傳へしに實の神の託宣を仙の哥
うもふゝ 悉く彼等の言をうもふゝ

人鏡論三卷

反古極云人鏡論是利義政也といへとはん必物終るをまのさま
 賤し森原中納言常高より古く物終る其四の少物といへるを同
 席より是利義政といふものも物多き者、名を借りて云ふこと此序
 拾遺集に載るなり

廿五家書二卷

類聚名物考云薩家遺戒也也といふ偽を云ふ字といふ
又云此方の中宋家爲の言なり後々諸君を偽るといふ物
より偽者莫きに往来といふ類

釋書款

十王經

古事記傳卷六云世に十五位と云ふより、閻魔王、自人間地、去五百
里、善那、名無仁世界、亦名、彌陀、云々と云ふ此經、七と云ふ偽
と云や、又我邦に、心ん、云々、彌陀、云々、神典に依て、此
の、若し然ると、かくりて、神典に、餘美と云く、若し此經も、出
こゝと疑ふ人も、あり、云々、思ひて、今、亦、おこ、あ

玉璫問卷十云、二十王座といふ物あり、佛説地持菩薩摩訶因縁と名けしなり、其いふことにも、皆あけられ、松き仍りてあり、さういふ唐土より傳へといふ多くあるを、是にせよ、あつてといふ皇國人の心へうきなり、其文の中へ云りて、云々、別都頓宣壽いはんとしきなり、死天の志の山葬、吹のさうづつなり也、所傳者、三といふ

つて川と云い守初開男と云い大き物候をいふ事
まゝ留母の中いひて入る説とて此の事と云ふ
世といふと入る世にせざる物といふ人七あるいふにきある
こつての事なるものと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
くか世の説と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
玉釋卷四云佛説十王經といふ物といふ、阿闍王の魔寸、思目とい
ふとと觀音といふ物といふ世の事を遠くえき、其王
に告ぐといふ事と云ふ事と云ふ事、思ひつとて皇國
の佛ありと云ふ説と云ふ事と云ふ事、漢の天子の佛と云ふ事
又云とてと云ふ事と云ふ事

作歌歌實卷二云十五王は山融一茶とて、瑞代に佛心とて物と云
然わりの抄抄殿殿が袖中抄日蓮坊の十五王讃歎抄殿殿の

頃の春露に草子源氏河海抄にも引用といふと云
書

古今妖魅考、此經或は漢僧の戲心とて後、我邦人種と撰入れ
るもの、其に邦人の佛心と云ふ事、其に事状を記して、誤り
と云ふ姑く此説も存せしむ

延命地藏經

古く延命地藏經と云延命地藏經といふもの、天狗土公大袖といふ
事あり、此の經に依りて天狗といふ事と云ふ事と云ふ事、佛心
と云ふ事と云ふ事と云ふ事

説法明眼論一卷

和名辨卷四云一柑の蔭の初やとて、一河の流と云ふ事と云ふ事、
の像といふ事と云ふ事、其の傳へ行ふが如く、漢書にも見へる

古き語と云ふは其の古き語と云ふ白痴のうたひなり
といへり余上物不憚るなりとて宗福寺といふ刹刹を説法の
眼論と云侍りしに右の語此の中載りし眼論の聖徳太子の心
こと本朝書信に云ふ八百四年以前に佛撰しと書し日佛撰
んといふ語あり前より云ふは是や其の出る所なりと云ふ

日蓮親書讀漫茶羅記

異國就未祈禱注録

管蠅抄附録載弘安記云、按本書記文亦弘安事甚詳、然後
人所偽心謬誤不少、仍不取正處、下假之とあり此二書を載
す

清淨法行經

安齋隱筆 卷四 第七十三聖賢 云清淨法行經曰我造三聖、化彼震旦

下集卷之八 月光菩薩彼稱教團、光澤菩薩彼稱仲尼、如量

菩薩彼稱老子、此經又一條並良公の桐嶋曉筆に引けり下
集集より引けり古文後集の前言より引けり我回諸神本地垂
迹と云ふなり又漢土聖賢も本地垂迹あり彼經の偽
經と云ふは後集又此法傳教智証慈光の所心なり漢土
の僧の心ありあり又馬の馬頭觀音の化身と云ふは迦葉佛の
化身 葉花也 こと云ふ蓋し其の本地垂迹と云ふは日本書紀七漢土の聖賢
も牛馬も何れ彼も皆佛の化身也と云ふは仙と云ふは其の化身なりといふ
と偽と云ふは仙法に妄語載を説くは佛説の妄語なり其妄語を
号して方便説と云ふ妄語の罪なりとて地獄なり云を板と云ふは釋迦の
才一省も云を板と云ふは佛説の偽を号して判家を欺きなり庶民を惑
はし欺惑を貪るは妄語の異名を方便と云ふは其の計なり

ふふふ

法華經疏 四卷

維摩經疏 五卷

勝鬘經疏 一卷

上宮聖德法王帝説云即生法華經疏七卷證注云按勝鬘經疏一卷維摩經疏五卷法華經疏四卷今將存于世然卷數不合可疑

枕草紙 一卷

塩尻卷云源信源信枕草紙長保三年三月の心一巻あり此源信の作なり親心要略と同一後世台家私心より山門の宗徒より實より一乘要訣及往生要集等の業と巧拙の異ありのみと解義云按

類聚名考云今案に勝鬘經義疏聖德太子の作との給ひと昔此方の僧雲持渡りと云ふと又疏に加へると云傳へて今印本五卷あり卷首に勝鬘經義疏私鈔と有る惟揚法雲寺僧明宣述とあり是は雲の人有りて太子の鈔と云ふは傳へるもの微なり疑ふべし元享中祥古は春に推古天皇の御宇太子此經を講し給ひ義疏を制せりと云ふ傳へるもの日本紀にも見えず勝鬘經奥書疏云此鈔者延暦寺座主慈覺大師以承和五年奉使入唐幸達揚州詢求法文緣指獲故遇此疏鈔寫得送歸獻山鎮花其疏主者南嶽大師後身上海天太子又鈔主者天台六祖妙樂太子祖師道合志榮師極吾所獲之流傳本朝可謂繫固之士權示先後傳教敘述末子信之須厚敬重又記十三年十二月十八日入唐沙門四給記案此疏を以て証文とすゆけん此文素いかりと爲し後人偽作と出づ

こと計りふりて印後貞享三兩年仲春刻す云々

地理類

日本風土記

古言梯附云諸國の風土記傳々今に云風土記と豊後

風土記のうへへ又遺り云云此をこり花土の風土記の遺り

る言と云ある古しうぬるの傳り考へる言と云

棟梁集云駿河風土記におも二種と書然と後人の

物と云ふはと云二種といふ言と云ふ

好古小録卷上云梅香碑に載する所の陸奥風土記の残る

疑々後人の偽撰と云ふ

玉勝間卷三風土記といふと云今に云出中二四

のみまたくていのこりもはつみる能ぬかくすもくちをさう

ハ庭仁うこるえうちつゝきなる都のみんれあるき書と云ふ

雜類 補遺

釵卷 三卷

梅園日記卷五云卷乃太平記凡例、印本今行于世者首有釵卷活字
古本及九郎異本並無當於南郡得釵卷四本題云平家物語釵卷
蓋釵卷元富附平家物語而近來誤附太平記耳とあり又慶代
輪池翁所藏古字本平家物語、亦釵卷を附し、其平
家物語に附し、其と論るべき、似たり然るに承應二年開板の單
行本釵卷三卷あると見、以て卷首に「つぎのまゝ」と題してあるは
く、俗に、案、此新増書籍目録
つゝの部に釵卷三卷あり今考ふと、俗に物語を平家物語
とすも、其附し、其物語ありて各あるを、いふといふに
平家物語と釵卷と牴牾するものあり釵卷云同一き二年案、元
暦二月
十一日に又平家物語の題ありとてわづらふべしと云ふ船屋ありと云ふ

七式に載んとも出来りしより、延長四年の頃、わ載すも弘仁
二年、とすんともあへ

姓尸録一卷

古史微開題記夏に云、拾遺抄に、姓尸録の部、は決めて、伎抄の
選名の者、いふも、古くも、傳ひる書も、拾ひ載る、物に
是、他部、いふ某部、こと記えん、此部、姓尸部と記さるべき
を録の字あるも、思ひ難あへし

職原鈔二卷

官職浮現或、日本書、官の職原抄、征夷將軍は、命を、筆を、と、
め、然る、鑑、職原抄、親王も、侍も、至て、後人、偽心、附合、
し、故、誤り、多き、中、侍と、古体、近りの、偽、准、
う、

吉野拾遺四卷

好古、山、紀、天下、職原鈔、と、是、号、る、卷、首、に、百、官、の、二、ふ、ある、
後、人、假、し、増、補、と、官、任、抄、明、職、の、原、鈔、等、の、名、を、つ、け、る、
吉野拾遺、四卷
群、書、類、經、北、書、を、収、め、卷、尾、に、云、右、吉野拾遺、上下、二、卷、以、所、
四、本、書、官、次、屋、代、弘、賢、花、本、校、合、昇、流、市、印、本、偽、造、為、四、卷、
十、三、才、四、文、体、名、同、且、記、不、異、其、中、特、所、載、某、向、成、保、宗、祇、法、
師、心、則、後、人、竊、入、不、得、其、下、也

類聚名物、云、思、ふ、に、吉野拾遺、命、松、丸、と、某、と、い、い、傳、ふ、と、
性、と、い、ふ、と、且、又、其、子、ぶ、う、と、い、ふ、と、多、し、後、人、の、偽、心、
も、た、ん、と、又、さ、も、あ、る、も、ち、あ、る、其、頃、の、古、記、又、人、の、書、添、
し、れ、う、ん、と、い、

梅園日記、卷、四、云、吉野拾遺、卷、二、三、か、き、く、り、志、の、紙、つ、く、如、

いはいの法梅るまの拾遺●一二の卷の傍方々々も詳に数往に陳泉
なる早見といふる志のをつくと云こと無下よりと訂也是七亦仍
書の二面也古くはのれきといひ

十訓抄

類聚名考云三訓抄と無今本十訓十卷と云ふ仍心

三議一統

秋草卷上武家礼法の卷云今世三議一統といふ書あるも是の書は
長素の他筆の南家礼集といふ書の書端に後人序と傳ふが
といふ書を心り加つて其序は義満公の仰りていふる公序
助長素今の左京大夫氏頼伊勢守武所守清忠三入議を
いふちう故にとも三議一統大章儀と名するも即ち是
の家守法集と名ふて義満公の仰りて撰む者なるべし

義満公

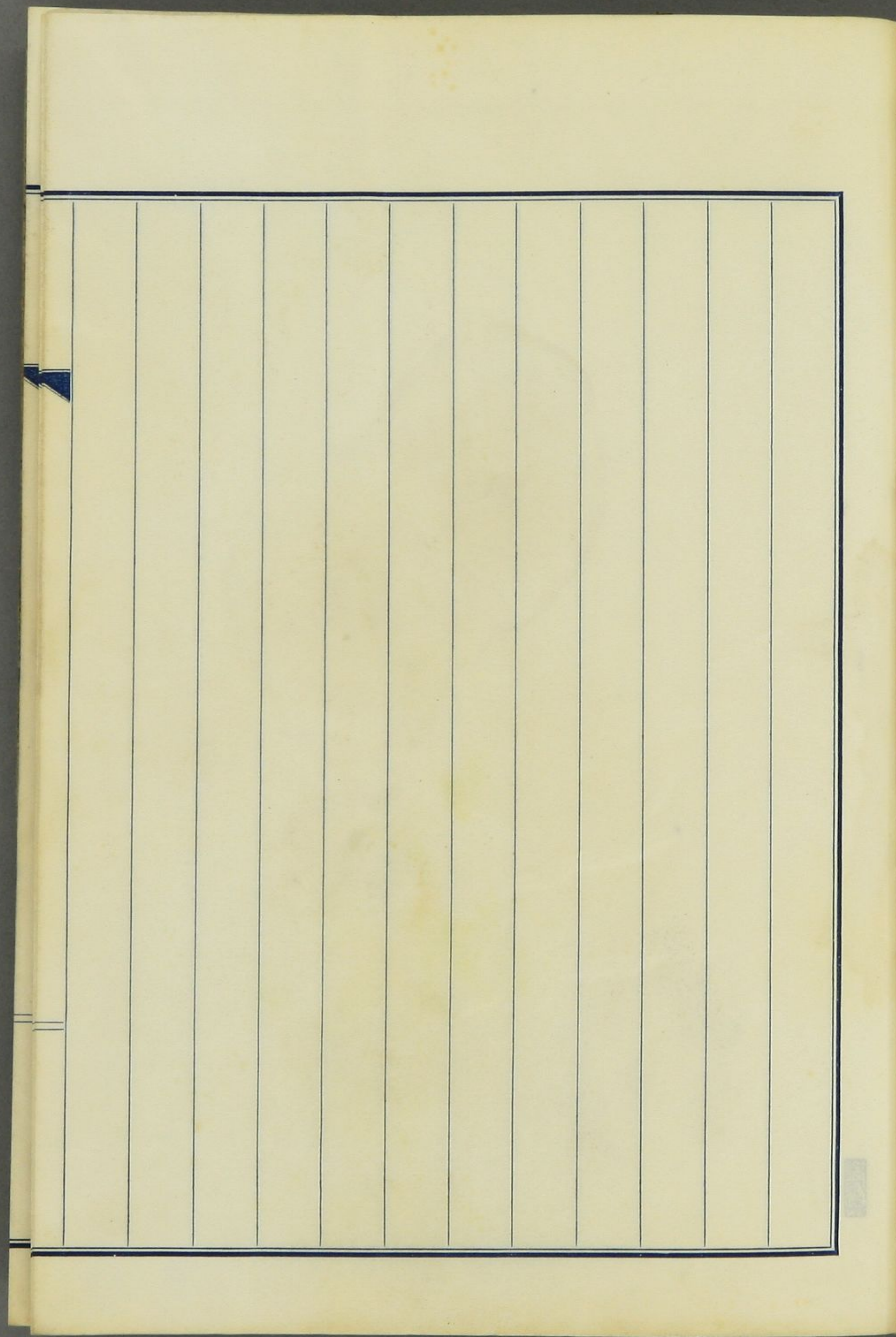
てうこへて彼序と後の人ゆへに付添るこゝの南家守
法集を就ていふといふも古きにも私に他筆物とみたり
の仰りて撰むに休まらざるなり他筆なるか一言のいふ
もいふに将甲の仰りて撰むに難しといふべし
古より書きし余は先年書きし三議一統并といふ
に記す前といふこと義満公の心より礼書の意の
亂の時亡びしこと通照るなり
伊勢守左京大夫頼伊勢守清忠三入議を助長素今の左京大夫氏頼伊勢守武所守清忠三入議をいふちう故にとも三議一統大章儀と名するも即ち是の家守法集と名ふて義満公の仰りて撰む者なるべし
名道云殿中の礼品并諸人位といふに命あかしへの法書
雖有之然以被定て法則の底に義満公の御代に以條數被
定置託為御物殿中不し御式目ハ底に一礼に傳ふに此
序に復古被仰りし也貞仍古の御物にありて未だ
置て内へなきに
復古の御物にありて未だ置て内へなきに
名金仙寺の頼伊勢守清忠三入議を助長素今の左京大夫氏頼伊勢守武所守清忠三入議をいふちう故にとも三議一統大章儀と名するも即ち是の家守法集と名ふて義満公の仰りて撰む者なるべし

又増補前頁述の伊勢右京亮 彼礼書亡び失しう是を如何と 満忠或は
三人が將軍義政の代に 臣 礼書亡び失しう是を如何と 満忠或は
とあり 満忠も伊勢右京
系図に無て

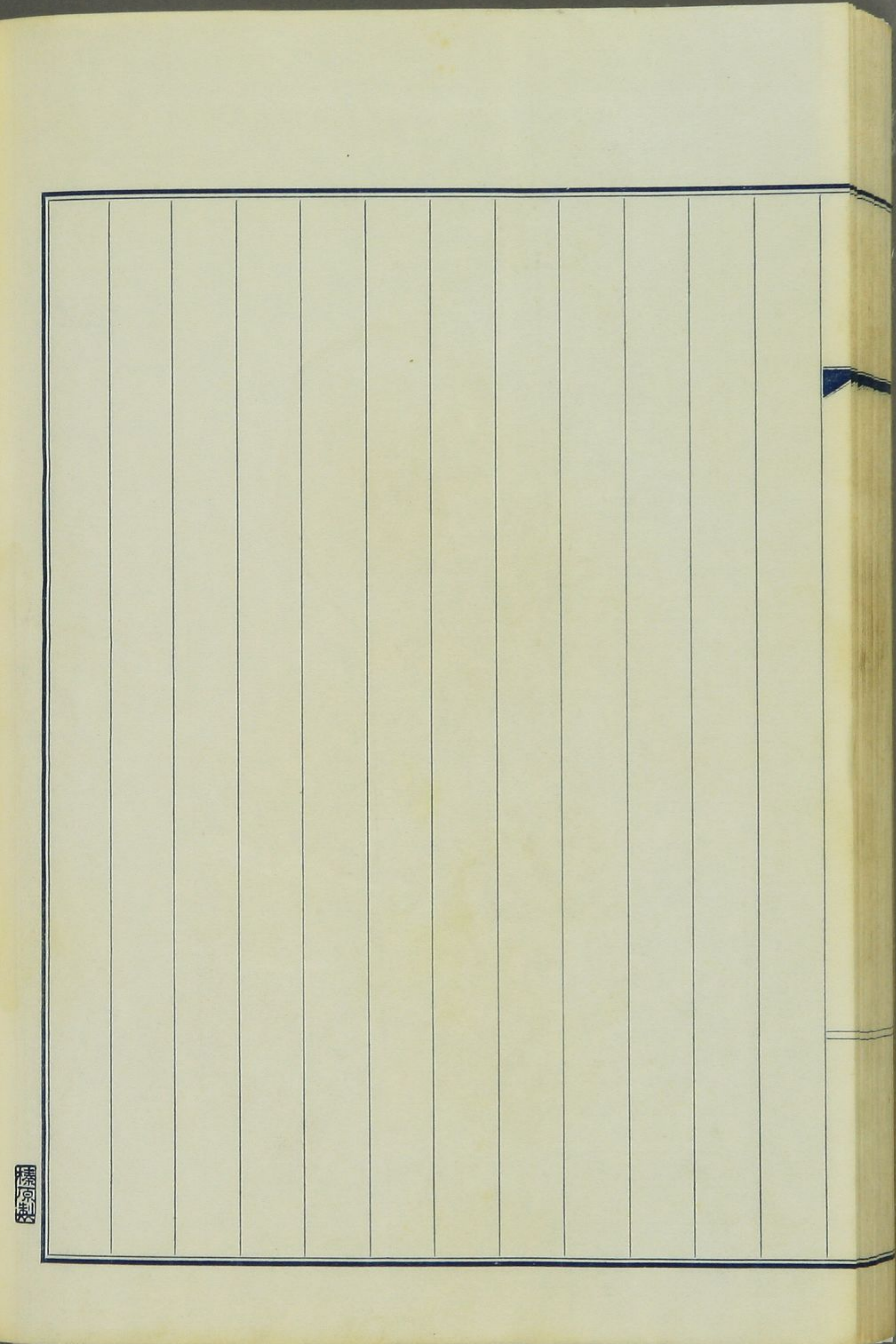
貞丈雅記卷一礼法部より又南朝礼儀と云書に親持將軍の御代を
永三年に定る長春今の範忠伊勢右京行の仰せも武家の礼式を定
めとあり然れども今の伊勢の家譜より其う見えず伊勢の家譜に
ハ三人の名も時代も又おかしう三家の人礼式を定るといふ信用し
難し別三議一統并と云書より重く記し置く

貞丈雅記卷十六云貞丈素より三議一統の書一巻の書やう將
軍家の仰をうけむりも親持の書といふ事と見え自身の見むと
いふ也貞丈義満公御代今の左京大夫氏頼伊勢武持守満忠
といふ人より其比の今川伊勢守貞世伊勢の伊勢守貞信
より是を其代に雅記に記し置くといふ事と見え伊勢の伊勢守貞信
より是を其代に雅記に記し置くといふ事と見え伊勢の伊勢守貞信

の題名は後人の偽心とて彼書の本文にいうも古き者と見ゆと
月三つへきよと云又彼書の題名より南家系法集三議一統大双
紙とありいふ書雅記にも是を長き題名の書にあるとあり
也是も元来南家系法集といふ云々も後三議一統と云
名をいふと書と入る所の長き題名と成りて伊勢守貞信



清
室
藏



以下全て
白紙

